

「隠喩としての自閉症——構想力の<盗用>をめぐる試論」

発表者：辰己一輝（大阪大学）

1.はじめに

本発表は、昨今の「自閉スペクトラム症」（以下 ASD と略記）に対する、主に国内の「哲学的」諸言説を簡潔に整理したうえで、それらの研究をより発展させ、ASD 当事者の社会的・臨床的実践とつなげていくための予備的考察を行うものである。日本における哲学・思想の展開をある視点から眺めたとき、その「精神分析」あるいは「精神病理学」との親近性に焦点が当てられる。一方で精神分析がその理論的枠組みを練り上げていく過程で様々な哲学者たちのテキストを参照してきたことや、木村敏や中井久夫ら著名な国内の精神病理学者たちが、現象学やフランス現代思想などの哲学的知見を明示的に取り入れてきたことが知られている。他方で、80年代の「ニューアカ」ブームの論者たちがたびたび精神病理について論じていたこと、とりわけ浅田彰が『構造と力』（1983）や『逃走論』（1984）で展開した「パラノ」と「スキゾ」という語が社会一般にまで普及し、その年の「流行語大賞」にまでノミネートしたことなども、国内における哲学を含めた人文知と臨床の「近さ」を物語っているといえる。そして、両者を思想的につなぐ共通語彙となっていたのが、浅田が「スキゾ」と簡略的に概念化したいわゆる「統合失調症」であった。しかし 21 世紀に入って、その状況に変化が訪れる。2000 年代に差し掛かり臨床実体としての「統合失調症」が急減し、それと入れ替わるかのように社会的に議論されるようになったのが「自閉症」あるいは「発達障害」であった。このような流れと呼応するように、人文知の領域内でも統合失調症から ASD へと関心のパラダイムが推移していったように思われる。

事実、ASD をある種の哲学的・思想的系譜の最先端に位置づけようとする様々な研究が近年国内でも試みられてきた。精神科医の松本卓也は『創造と狂気の歴史』（2018）において、プラトン以来の西洋哲学が現代で言うところの「統合失調症」を哲学的真理が開示される究極的な「狂気」として特権化してきた歴史を精査しながら、その統合失調症中心主義的パラダイムの今日的転換点として、ジル・ドゥルーズの哲学に ASD 的特徴を見出すという形で終えられている。小泉義之は『あたらしい狂気の歴史』（2018）で、「狂気」をめぐる時代の思想的変遷を「精神の狂気から行動の狂気へ」というテーゼで概括し、社会における「狂気」の所在が、並外れた思考や言語（精神の狂気）ではなく、目に見えて「異常」とされる身振りに求められるようになった「行動の狂気」の時代である今日の言説状況に自閉症を位置づけた研究を行っている。

こうした時代状況の中で、ASD は多数の哲学者や精神病理学者によって注目され、各人が様々な概念装置を援用してその実相の解明を試みてきた。ここ 20 年ほどで自閉症に関する哲学と精神分析・精神病理学双方からの理論的研究は一定量の蓄積がなされ、ある程度体

系的な整理が可能となる段階にまで達している。本発表ではそれらの内「哲学」研究としてアプローチされている諸研究に焦点を絞りつつ、それらを今後も発展させていくにあたって一つ大きな問いを投げかけるところから始めてみたい。それは、哲学における諸概念を ASD へと応用する前に、そもそも「哲学」それ自体が、ASD を定型発達に対して（論理的にも価値的にも）二次的で従属的なものとみなす「定型発達中心主義」的な価値基準を前提とした理論となっていないか、という問いである。なぜこのように問うのかといえば、歴史上、病や障害について語られた諸言説の裏には、常にある種の差別や抑圧を生み出す権力関係や社会規範が存在してきたという事実が思い起こされるからである。今日数多くの議論を呼ぶ ASD の当事者たちもまた、定型発達中心主義的に設計された社会の中でそのような抑圧に直面してきたという事実を考えた時、ASD について論じる哲学的諸言説もまた、そうした文脈の内で再検討される余地があると思われる。こうした問いは ASD についての哲学的アプローチの社会的・臨床的実践上の意義を考える上で避けて通れない問題であるだろう。

ASD に限らず、病や障害が社会的・歴史的な文脈の中で特定の意味を帯びようになる現象を考えるとときにしばしば参照されるのが、スーザン・ソントグ『隠喩としての病』（1978）である。ソントグは本書で、とりわけ結核と癌という二つの病が、西欧社会においてその臨床的実態とは異なる様々なイメージを付与された「隠喩」として流布されてきた歴史を批判的に描出している。ソントグの主眼は、ある種の病や障害をめぐる諸言説がそれらの病の意味を歪曲させる暴力的作用を解明することであり、その問題意識は、「健常者中心主義」的な規範を再生産する社会が、まさしくその再生産の過程において様々な病や障害に社会的「意味」を付与し（例えば精神疾患を「犯罪」という表象と安易に結びつけることなど）、社会規範の維持のために流用してきた歴史を告発してきた障害学 Disability Studies においても反映されている。本発表も、ソントグないし障害学におけるこうした問題設定を継承する。すなわち、ASD を取り囲む哲学的諸言説の中で構築されうる、いわば「隠喩としての自閉症」を批判的に精査する視角を前提として本発表は進められる。

2.現代哲学における ASD 研究の諸論点

本節では、ASD に対する哲学からのアプローチを採用した研究に共通してみられる諸論点を析出し、整理していく。紙幅の都合上、そのすべてを詳細にわたって記述することは叶わないが、これから本テーマについて議論していく上での暫定的な足掛かりとして、以下の6つの項目に分けて整理を行った。それでは順にみていこう。

1)哲学的「他者」概念を中軸とした考察

既存の ASD に関する哲学的研究は、ASD 当事者による他者との（定型発達者からみて）特殊な関わり方に注目し、その説明原理として哲学的「他者」概念を導入した考察を行って

きた。国内の哲学的な ASD 研究の嚆矢といえる村上靖彦『自閉症の現象学』(2008)は、現象学的手法によって ASD 者の体験世界にアプローチした結果として、他者との関係における困難をはじめとした ASD 者の経験の根本要因として、彼が「視線触発」と呼ぶ契機の不在(ないし程度の相対的弱さ)を主張している¹。視線触発とは、「視線や呼び声、触れられることなどで働く、相手からこちらへと一直線に向かってくるベクトルの直観的な体験」(村上 2008: vi)を意味する。例えば、重度の ASD 児を観察した時、親も含めた他者と視線が合わなかったり、呼びかけても相手の存在に気付かなかったりするケースがみられる。村上はこのケースを受けて、定型発達者の場合は、他者から自分へと向かってくる視線や呼びかけなどの「志向性」の感覚を意識することなく受容しているのに対して、重度の ASD 児の場合はそうした感覚が受容されていないと解釈する。加えて村上によれば、この視線触発を受け取ることによってはじめて自己と他者、現実と空想といった区別が発生し、自己の身体感覚・運動感覚が統合され、定型発達の空間・時間の経験が準備されるという。この意味で村上が想定する「他者」からの触発という契機は、人間の体験世界の構造化を根本から条件づけていると同時に、定型発達者と ASD 者の経験世界の差異を理論化するための基礎概念となっている。こうした理論的前提に立つならば、視線触発をもたらす「他者」の存在は、ASD の経験を考察する上で極めて重要な位置を占めることになる。

また、『<自閉症学>のすすめ』(2019)において野尻英一は、①単に意味を伝達すること＝コミュニケーションをすることと、②意味を交換することに欲望を持ち、そのことによって「自己」を形成すること＝「社会性」を獲得することを区別し、ASD において問題となっているのは前者ではなく後者であるとしたうえで、それを「自己」と「他者」の関係性という西洋哲学の古典的な問題系へと接合する(野尻・高瀬・松本 2019:90-92)。野尻は、カントやヘーゲルの哲学を念頭に置きながら、定型発達の「自己」(野尻はこれを「近代的自己」ともパラフレーズする)の形成が常に「他者」との関係性を前提として成り立っていると説明する。定型発達の自己とは、他者が何を感じ、何を欲望しているのかを知ろうとし、その欲望と疑似的にシンクロすること(意味の交換)を通じて自己定立する存在である(定型発達者の共同体における円滑なコミュニケーションや共感もこのシンクロ作用に由来すると説明される)。この意味で自己とはそれ自体において最初から存在するわけではなく、他者の視線を自らの内に取り込むことではじめて成立するのだが、ASD の場合はこのような作用が働いていない(「意味の交換」が欲望されていない)のだと述べられる。

これらの研究は、「他者関係の障害」「コミュニケーションの障害」と安易に捉えられがちだった従来の ASD に関する独断に疑問を呈し、そもそも ASD の当事者にとって「他者」との関係がどのように生きられているのかを精緻に分析する試みだといえる。近年ではその他にも、國分功一郎が論文「類似的他者 ドゥルーズ的想像力と自閉症の問題」(2019)で、上述した村上の他者論(視線触発論)を参照しながら、ジル・ドゥルーズによる「無人島」論の読解を通じて、ASD 者の経験の構造化の説明を試みるなど、「他者」という主題は論者によって様々な形で展開されている²。

2) 「否定 (性)」という契機の欠如、純粋な肯定性の発露

ASD における「他者」の不在は、より抽象化されて「否定 (性)」という契機の欠如としても解釈される。前述した村上靖彦『自閉症の現象学』は、この否定性の発生を、ASD 者に特有の空間把握を例として論じている。村上は本書で、ASD 者が建物を正面から見た際に、その建物の「裏側」にも建物が地続きで存在していることを想像しづらく、空間を「自分に見えている面」だけが実在する二次元的なものとして捉える傾向があるという観察上の事実に対して、次のような考察を加えている。定型発達者の経験世界においては、自分が見ていない部分（建物の「裏側」）にも世界が存在していること、すなわち、「見えないけれども存在しているもの」があるという信念が形成されている。ところが、特に重度の ASD 児においては、「裏側」という存在の信念が形成されておらず、「自分に見えていないものは端的に存在しない」と判断することになる。村上は、ここで「見えないけれども存在するもの」という存在論的身分がありうることをまさしく「否定性」と表現している(村上 2008:89)。何か欠如している・存在していないという「否定」の判断が発生するためには、自身の知覚によって汲みつくしえない、間接的・媒介的にその存在を了解することしかできないような何かが存在するという意識が逆説的にも生じていなければならない。しかし、とりわけ重度の ASD 児の場合は、見えないものは端的に「存在しない」ため、そこに何か欠如しているという意識自体が生じえないと村上は述べる。

「否定性」の欠如という主題は、相川翼によっても別の観点から取り組まれている。相川は論文「自閉症の哲学的考察による「人間」観の再考」(2018)で、定型発達と ASD との差異を「他者」ないし「否定性」を必要とするか否かという基準から説明している。相川曰く、定型発達も ASD も同じ「同一性」の次元に生きているのだが、ASD 者が「純粋な同一性」を生きているのに対して、定型発達者は「他者／他性」を媒介とした「同一性」を生きているという違いがある(相川 2018:320-321)。この議論は、上述した野尻による他者との「意味の交換」の議論を肯定／否定という論理構造から捉えなおしたものとして理解できる。定型発達者は自己の「同一性」を、他者の視線(他性)を媒介することによって定立する(そうせずにはいられない)。これを論理構造に置き換えるならば、定型発達においては「 $A=A$ 」という同一性が必ず「非 A」という否定性を媒介することによって成立しているということである。反対に ASD 的な「同一性」とは、「非 A」のような他性を一切必要としない純粋な「 $A=A$ 」が生きられている状態とされる。

したがって否定性という契機の欠如は、そのまま純粋な肯定性、何によっても媒介されない直接性としても理解される。この観点から、ASD 者に特徴的とされる「常同行動」の意味が特定される。常同行動とは、同じ体の動きを繰り返したり、同じ言葉を反復的に発声したりするような文字通り常同的な行動のことであるが、相川が提示した論理構造に則るならば、そうした行動は「 $A=A$ 」という純粋な直接性、「ただ A である」という否定性なき事態を生きている状態として解釈される。

3) 「構想力」(想像力) という心的能力への着目

以上のように記述される ASD 者に特有の経験構造を解明する上で、既存の哲学的な ASD 研究では、カント以来の哲学史における「構想力」という概念への注目が集まっている。より一般的な語彙に言い換えれば「想像力」という言葉におおむね対応するこの概念は、國分が説明するように「ある対象が存在していないにもかかわらずそれを直観する心的能力」(國分 2019:143) と簡潔に定義できるが、その具体的内実については論者によって様々な解釈がなされている。例えば國分は、前節でみた村上による「裏側の経験」という事例を引きつつ、まさに「見えていないところにも世界が恒常的に存在している」ことを想像可能にする能力としてカントの「構想力」に触れている(國分 2019:147-148)。村上自身もカント『判断力批判』の構想力論を参照し、ASD 児にみられる並べ遊び(ミニカーを特定の形状にびっしりと並べたりするような遊び)などの常同行動を、「構想力の純粋な発露」として説明している(村上 2008:113)。また、これらの研究において本概念への言及は副次的なものとなっているが、本概念を中心的に扱った ASD への哲学的アプローチも存在している。例えば相川翼『自閉症の哲学』(2017)は、特にカントの「構想力」概念を ASD 理解へと応用した体系的な研究を提示している。まず相川は「構想力」を、「イメージを産出する能力」と簡潔に規定している(先述した國分の定義と突き合わせるならば、「目の前に存在していないもの＝イメージをそこに作り出す心的能力」と言い換えられそうである)。本書では、そうした構想力の働きが定型発達者と ASD 者では異なるのではないかという問いから始まって、その検討のために、アラン・レスリーが提起した ASD 者における「切り離し作用 decoupling」の上手いかなさという論点が援用される。定型発達者においては、現実から「表象」(イメージ)を切り離すメカニズムがスムーズに働くのに対して、ASD 者の場合はこれがうまく働いていないのだとするレスリーの仮説を受けて相川は、ASD 者の状態を「表象が目の前から離れず、現実とぴったりとくっついている」状態と捉える(相川 2017:72)。相川はこの状態を説明するために「構想力」(想像力)という概念を導入し、定型発達者においては構想力が「現実」から遊離して自由に発揮されるのに対して、ASD 者においては「現実」に張り付いたまま発揮されていると解釈する。この意味で相川は、ASD 者における構想力のあり方を「直接性に依存する構想力」と表現し、ASD が住まう「場所」を「直接性の傍ら」に位置づける(相川 2017:108)。ここで析出される現実／表象が未分化の状態は、前節で相川が「否定性」なき純粋な肯定性 $A=A$ と定式化していた ASD 者のあり方を別の観点から言い換えたものであるともいえる。

ここで重要視されているのは、定型発達／ASD の区別は、構想力という働きの有無によって(ある種階層的に)規定されるわけではないという点である。むしろ相川の狙いは、定型発達／ASD という区別がそこから生じてくる場所の共通根として「構想力」を位置づけることで、両者を「構想力」の働き方の違いという形で並行的に理解することである。相川は、定型発達か否かに関わらず人間において構想力は働いていることを前提として、構想

力の働きを「直接性に依存する構想力」・「システム化する構想力」・「共感する構想力」の三つに類型化し、各働きの発揮される程度の差異に応じて、定型発達あるいは ASD 内での差異を鑑別する哲学的モデルを提唱している（相川 2017:132）。

この発想は、同じく「構想力」概念をキーワードとした哲学的研究の中で ASD を解釈する野尻英一「未来の記憶」(2018)でも示唆されている。相川がカントの構想力論を参照したのに対して、本論文で野尻はヘーゲルの構想力論を参照し、近代的自我において行使される能力としての「構想力」とは区別される「原-構想力的なもの」というオリジナルの概念を提唱する。野尻によれば「原-構想力的なもの」とは、(ある意味で相川と同様に)そこからカント的な感性／悟性、現象／物自体といった区別が生じてくる根源的力動であり、その力は「自我」の形成にも先行する非人称的なものである(野尻 2018:30-31)。この非人称的な力が「自我」によって捕縛されるときに、自我の能力としての「構想力」が生起する。同じ説明箇所野尻は「原-構想力的なもの」をヘーゲルの『精神現象学』における「否定性」の運動に相当すると述べている。先述した相川による否定性の議論と重なるが、要するに(原)構想力の本義とは、否定性を通じた統一の力能、非 A という他性を媒介として同一性を確保する、まさしく「弁証法」を可能にする力能として捉えられる。野尻自身が『<自閉症学>のすすめ』で論じていた他者との「意味の交換」を通じたシンクロも、おそらくこの「原-構想力的なもの」による弁証法の作動において根源的には可能となっていると理解できる。そして「未来の記憶」においては明示的に主張されていないが、自我に捕縛された能力としての「構想力」が近代的・定型発達の自我に帰属させられているのと同時に、ASD がそれとは異なる存在様態として記述されていることから、おそらく ASD についての理解を深める上で「原-構想力的なもの」に立ち返った考察が必要と述べられているように思われる。

4)物質・実在への接近（昨今の哲学における実在論的傾向との類縁性）

前節でみてきたような解釈とは別に、自閉症における肯定性（即自性）という特徴を、現代哲学における「実在論」や「唯物論」の再評価という流れと関連付ける、より現代的な解釈もある。昨今のいわゆる「思弁的実在論 Speculative Realism」と呼ばれる思潮は、近代哲学の支配的前提であったカント的現象／物自体という区別と、それに伴う現実世界（物自体）へのアクセス不可能性という問題設定（これをカンタン・メイヤーは「相関主義」と呼んで批判する）を超克し、「実在」や「物質」を直接的（無媒介的）に思考することを目論んでいると大まかには理解されているが、まさしく ASD における無媒介的な知覚経験が、そうした思弁的実在論の問題意識と近いところに位置するのではないかという指摘である。例えば松本卓也は、スティーヴン・シャヴィロが『モノたちの宇宙 思弁的実在論とは何か』(2014)の中で、まさに ASD を「相関主義」ではない思考によって世界と関わる精神のモデルであると言及している点に触れ(シャヴィロ 2016:194-195)、ASD 者の体験世界を記述可能な枠組みの一つとしての「思弁的実在論モデル」の可能性を示唆している(松本 2018:63-64)。また千葉雅也は、松本との対談で、昨今国内で臨床と人文知との媒介項が「統合失調

症」から「自閉症」へとシフトしていることと、海外の哲学的動向がポスト構造主義から思弁的実在論へとシフトしていることをパラレルに捉えうることを示唆している(千葉・松本 2016:8)。ここでの千葉の整理に依拠するならば、統合失調症において問題となるのは相関主義的な意味での「外部」、すなわちカント的現象／物自体(ラカンで言えば「現実的なもの」の次元)の枠内でみた外部＝物自体であるが、ASD において問題となるのはそういった内部／外部という二項図式そのものに対する外部＝非相関主義的な外部である、ということになる。前節までにみてきた研究が ASD において論点となっている審級を、観念／実在、精神／物質などといった二項対立の「あいだ」に存する「(原)構想力」という中間的次元、あるいはそれら二項対立が分化する「以前」の発生的次元に位置づけているとすれば、以上の解釈は、そうした二項対立の錯綜それ自体の外部と ASD を関連付けるものと言うことができるかもしれない(この両解釈の差異については本発表の最後にもう一度言及する)。

5) 「隠喩」概念を用いた ASD に特有の言語使用の解明

ここまでみてきた諸特徴を踏まえたくて哲学は、ASD を安易に「コミュニケーションの障害」と断じるのではなく、当事者たちに固有の言語使用に注目し、そのメカニズムを詳細に考察する必要があると説いてきた。その固有性を描出する際にしばしば争点となるのが「隠喩」概念である。その概念について論じられる背景に控える精神分析などの知見を念頭に置いてごく簡潔に述べるならば、「隠喩」とは、ある言葉の意味が常にその外にある別の意味を間接的に名指す＝象徴するということ、あるいはそうして名指されたものもまた別の何かを意味(象徴)しており……といったように、名指しが無限に連鎖するシステムそのものを意味する。それは上述した「否定性」という議論とも本質的に関わりを持っている。ある言葉が常にそこで意味されるものの外部を象徴してしまうという事態とは、言語によって直接把握しきれない何か、すなわち「否定性」(他者)が存在しているがゆえに起きることであり、その意味で隠喩的な言語使用とは、絶対に汲みつくしえない余剰＝否定性を中心に無際限に作動するシステム(シニフィアン連鎖)だといえるからである(これがおそらく村上が問題としていた「裏側」の経験という論点とも結びついている)。ここから翻って提示されるのは、「否定性」の契機を持たない自己充足的な世界を生きるにされる ASD 者にとって言語使用は、そうした隠喩のシステムに拠らない言語使用となっているのではないかという仮説である。この点については村上の著作の一部でも論じられているが、竹中均の著作『精神分析と自閉症 フロイトからウィトゲンシュタインへ』(2012)は、そうした村上の考察を踏まえながら、主にフロイトとラカンの精神分析を念頭に置いた隠喩と ASD をめぐる考察を行っている。竹中は本書で隠喩を、人間が外界へとアクセスするために必要不可欠な要素と位置づけ、ゆえに定型発達の仕方での「他者」との交流、ひいては「社会性」の獲得も隠喩によって可能になると説明する(竹中 2012:221-222)³。他方で竹中は、ASD 者の言語行為を単に隠喩の欠如や機能不全として捉えることに疑問を呈し、むしろそこに

社会とつながるための積極的意義を見出そうとしている。本書では、先述した村上による「並べ遊び」の事例が取り上げられるが、竹中はその常同行動のメカニズムを、定型発達のな言語行為とは別の仕方で外界に接続し、コミュニケーションを取ることを可能にする「代替的な隠喩の一種」ではないかと解釈している（竹中 2012:234）。

6)社会理論的・政治理論的文脈における理論化

ここまでみてきた議論を、特定の社会理論的・政治哲学的文脈において考察する研究もいくつか存在する。先に解説した野尻英一の論文「未来の記憶」では、（あくまで仮説的な言及に留められているが）近代社会ないし近代資本主義に組み込まれない存在としての ASD という社会理論的規定が示唆されている。野尻は、20 世紀後半の現代思想が、精神分析によって定式化された「神経症」と「精神病」という鑑別診断の類型を元手に、前者を「資本主義経済を駆動する労働力としての近代的精神」の類型、後者を「その開平によって資本主義経済による人間精神の労働化を乗り越えていくポスト近代的精神の類型」と位置づけてきたという整理を行っている（野尻 2018:93-94）。しかしながら、近年の資本主義の高度化（グローバル化や消費社会への移行）において明らかとなったのは、統合失調症的な開放性さえもが資本主義を駆動するエネルギー源として包摂されるという現実だったと野尻は指摘する。神経症も精神病も、他者との「意味の交換」による絶えざるシンクロ（野尻はこれを近代的に構造化された構想力の作用としている）の欲望から逃れられないという点で同じである。野尻はこのような現状を鑑みたくえで、むしろ現代において明らかとなっているのは、そうした近代資本主義の外部に属するのは統合失調症ではなく ASD であるという論及をしている（野尻 2018:96）。

また、千葉雅也の論文「儀礼・戦争機械・自閉症」（2019）も、ASD を「国家」との関わりという別の観点から考察している。千葉は、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが『アンチ・オイディプス』において、国家を「隠喩」によってすべてを捕獲し統治するシステムと規定していること、続く『千のプラトー』においてその「国家」に対置され、絶えずそれを脅かす存在としての「戦争機械」が論じられていることを踏まえつつ、自閉症をまさしく「隠喩」システムとしての国家の外部である「戦争機械」に位置づけている。これらの研究は、資本主義や国家が形成・再生産される過程を ASD との関係からより深く分析可能とするだけでなく、次節で論じるような、ASD を取り巻く権力関係や社会規範の問題を考察するうえでも手がかりとなるように思われる。

3.構想力の<盗用>

冒頭でも述べたように既存の障害学は、ASD を含めた様々な病・障害にアプローチする当の「理論」それ自体の価値中立性に疑いを向け、その理論がいかなる社会規範の再生産と関与しているのかをメタ理論的に分析するという問題意識を有している⁴。本節からはそう

した問題意識を踏襲する形で、前節までみてきた諸論点のメタ理論的な考察に入っていくが、そのためにここで一つ、考察のための概念を導入してみたい。「盗用 appropriation」という概念である。この語は第一に、障害学を含めたマイノリティ研究の領域において、マジョリティの側がマイノリティの文化圏で育まれてきた様々な要素を、それら固有の文脈を無視・軽視する仕方で恣意的に搾取・流用する身振りを指す、いわゆる「文化盗用 cultural appropriation」の意味で用いられてきた。加えてこの語は哲学においてしばしば「我有化」などとも訳され、自己にとって他なるものを自らの内に取り込み同一化する働きを指すという含意もある。本発表では<盗用>という語にこの二重のニュアンスを含意させたうえで、それを哲学的 ASD 研究のメタ理論的検討へと差し向ける。ASD に対する哲学的研究は、もし自らの理論的前提それ自身が「定型発達中心主義」的なものとなる可能性を検討することなしに進められれば、ASD の当事者たちが生きている経験の固有性を捨象したうえで、自らの理論の正当性（正統性）を裏付けるための資源として<盗用>し、定型発達者側の価値基準へと ASD 当事者を暴力的に包摂する＝我有化する危うさを伴うのではないかと問うてみたいのである。

さらにこの問いについての考察を深めていくために、本発表では<盗用>のメカニズムを「内容」レベルと「方法（形式）」レベルの二重構造において働くものと仮定することから始めてみたい。まず「内容」のレベルについて。例えば前述した村上や野尻の研究は、伝統的な西洋哲学史における「他者」概念を研究対象であるところの ASD に応用することで、当事者の経験の根底には「他者との関わり方の特殊性」があると解釈し、それを出発点として様々な説明を試みてきた。この点について熊谷晋一郎は、國分功一郎と対談した『<責任>の生成 中動態と当事者研究』（2020）の中で、村上の『自閉症の現象学』における他者論（視線触発の議論）に言及しながら以下のように語っている。

これ[村上による視線触発の仮説]をわれわれの仮説と比べてみると、因果関係が逆だということがわかります。われわれの考えでは、視線触発を受け取れないというのは結果です。視線触発を受け取ることができない原因は、他者と関わる以前から、多数派と[認識の]解像度が違うからです。（中略）これは単に記述における順序の問題という話ではありません。私たちがこの順序になぜこだわるのかというと、理由があるのです。自閉症に対する一般的な専門家のイメージは、他者関係における障害が根本にあるというものです。そういう意味では、現代の自閉症に関する通説は、村上さんの自閉症研究ときわめて相性がいい。はじめに他者関係の障害ありき。世界的な趨勢として、他者関係以外の問題はその結果であると論じる傾向があります。でもそれではいろいろ説明のできないことが生じるだけでなく、医学モデル的な弊害すら導かれるのだというのが私たちの考えなのです。（國分・熊谷 2020: pp,217-218）

本引用の最後に触れられている「医学モデル的な弊害」について説明するために、障害学に

おける「社会モデル」という基本的着想についてごく簡潔に説明しておきたい。障害学は日本語で「障害」と一括りにされているものを、本人に帰属可能な身体的・精神的特性としての「インペアメント impairment」と、個人に帰属不可能な、本人とその当人を不当に抑圧するように設計された社会環境との相互作用において生じる何らかの不具合・不利益としての「ディスアビリティ disability」とに区別するところから出発した。従来の考えでは、障害はもっぱら前者の意味で考えられ、結果としてその解決を当事者個人の医学的治療のみ求める「医学モデル（個人モデル）」が支配的だった。しかし障害学は、解決されるべきは後者の方であり、ゆえに問題の原因は個人ではなくその人を排除する社会の方にこそあるという「社会モデル」を提唱した。この社会モデルという発想に基づけば、「他者関係における障害」という現象は決して問題の「原因」ではなく、定型発達者というマジョリティに合わせて設定された社会環境と ASD 当事者との軋轢によって生じた「結果」に過ぎないことになる。しかし、原因と結果を取り違えてしまうと、そうした社会環境の問題、あるいはその根底にある定型発達中心主義的な社会規範の問題が見過ごされるばかりか、問題の原因とその解決を当事者個人にのみ求める「医学モデル」を再生産することにつながってしまう。こうした取り違えは、ASD 当事者の経験の<盗用>過程にも関わってくるだろう。というのも、そのような取り違えに気付かないまま研究が進行すると、当の理論に伏在する定型発達中心主義的な価値規範が問い直されないまま ASD へと投影され、結果として ASD 当事者の経験は、そのような価値規範へと一方的に包摂される危うさがあるからだ。ここで触れた他者論の例で考えるならば、そこで想定されている「他者」それ自体が、暗に定型発達の他者のみを包含した概念となってしまうことに無自覚なまま応用された場合、ASD 者における他者関係の困難は定型発達中心主義的に設計された社会との齟齬によって生じたものに過ぎないのにもかかわらず、それをあたかも ASD 者個人に帰属される「社会性の障害」という特性であるかのようにみなす結果とならないか、などといった検討の余地が生まれる⁵。

以上のケースでは<盗用>のメカニズムを追いかけるために、その理論が考察しているところの「内容」のレベルにおける錯誤に焦点が当てられていた。しかし本発表ではさらに一歩進んで、次のような仮説を立ててみたい。そもそも上述した意味での<盗用>というメカニズムそれ自体が、定型発達の「構想力」や「隠喩」の体制を前提として成り立っているのではないか、という仮説である。というのも<盗用>過程が、自身にとっての「他なるもの（他者）」を自らの内に取り込む「我有化」の働きであるとするならば、それはまさに非 A を介した A=A の再生産という定型発達の構造によって条件づけられていると考えられるからだ。このような仮説を立てることは、考察された経験的内容とは別のメタ的水準で、その理論が特定の内容をどのような仕方で考察しているのかという形式的・方法的（あるいはこう言ってよければ、超越論的な）レベルにおける<盗用>の可能性を問うことにつなが

る。例えば、上述の「構想力」概念を用いた ASD へのアプローチが、しばしば定型発達のなシステムがすでに成立した地点から出発して、そのシステム化以前に遡行することで ASD 的な領野を析出するという方法論を取る点について検討の余地が生じる。相川は、表象と現実とが「切り離し作用」によって分化する以前の「直接性の傍らにある構想力」を、野尻は感性／悟性などが分化する以前の「原-構想力的なもの」を事後的に抽出することで ASD の体験世界を描こうとする⁶。しかし、そうしたアプローチそれ自体が、最初に想定された定型発達のな構想力 A に対する「非 A」として ASD 的な構想力を客体化し、その「否定性」を介して理論的考察を行うという、定型発達のな構想力を前提とした方法論となっているように見える⁷。やや複雑な記述になるが、このとき定型発達のな構想力という方法論的前提は、定型発達のな構想力／ASD 的な構想力という二項対立それ自体を（否定性を介して）弁証法的に統一するという〈盗用〉過程を可能にしつつ遂行し、まさにその〈盗用〉過程を通じて自らの理論的正当性をより強固に再生産しているのではないか。このような観点を導入すると、たとえその理論が「内容」のレベルにおいて ASD の経験を、自らの定型発達中心主義性を相対化するものとして位置づけていたとしても、その方法的レベルにおいて自らの定型発達中心性を保持し、むしろより強固に再生産するという構造に陥る可能性を思弁することができるようになる。

また、このような〈盗用〉の過程を「隠喩」という観点から分析することも可能であると思われる。前述のような「否定性」を介した遡行的方法において「ASD」の住まう位置は、定型発達のなシステムから見た究極的外部として、すなわち、言語によって直接把握することが不可能なブラックボックス=X の位置を占めることになる。ところで、このような否定性としての X によって、前節で確認した「隠喩」というシステムは無際限に駆動するのだった。つまりこの時 ASD は、まさに定型発達のなあらゆる「隠喩」を可能にする源泉としての否定性(外部)=X の位置に固定され、隠喩のシステムそのものを構成する要素として、隠喩の体制へと包摂される形となっているのではないか。

さて、しかしながら、以上の指摘からの帰結として、「ASD を対象とした哲学的研究はすべて当事者の経験を暴力的に我有化することにしかならない」とみなしその営みを全否定するだけに終わるのだろうか。そうではない。もしそれだけで終わってしまえば、結局のところ「哲学」の内に ASD の居場所はないものとして、その存在を抹消されたままに留まってしまうからだ。逆に私が目指しているのは、「哲学」そのものの内に ASD の生を見出すことである。したがって本発表が結論として示唆したいのは、「哲学」の理論的前提そのものを変化させ、新たに再理論化する道である。そして、こうした試みは、例えば「他者」や「否定性」や「隠喩」といった概念を単純に放棄するのではなく、別の仕方で再概念化するための一歩となるのではないかと私は考える。

4.おわりに

本発表では、これまでの ASD に関する哲学的研究の整理を行ったうえで、これからの研究のための一つの問題提起として、<盗用>というキーワードを軸とした考察を試みた。ここで提起した問いに対して現段階で明確な解決法を提示することはできないが、今後の議論のための手掛かりとして、最後に「精神分析」という営みについてもほんの少し触れておきたい。なぜかと言うと、まさに精神分析は近年 ASD についての研究を積極的に進めているだけでなく、それらの研究「内容」に留まらず、自らの研究「方法」について絶えず自己批判的に思考してきた分野ではないかと思われるからだ。

例えば松本卓也は『発達障害の時代とラカン派精神分析』(2017)で、ラカンないしある時期までのラカン派精神分析が自閉症を精神病の下位分類あるいはそのヴァリエーションとみなしていたがゆえに、その理論体系内に自閉症の固有性を積極的に語れる場所を欠いていたのに対して、近年のラカン派精神分析が、70年代のラカンが発見した、各分析主体に固有の「享楽のモード(特異性=単独性)」という議論の再解釈を通じて、精神病とは区別される ASD 独自の経験を記述しようと試みてきたという整理を行っている。1970年代のラカンには、言語との原初的な出会いが子どもにとってトラウマ的な出来事として経験されるという(50-60年代の議論にはなかった)新たな論点が見いだされる。この論点の発見は、ASD 者に特有の言語使用が、そういった外傷的出来事に対する自閉症に固有の対処となっているのではないかと考える視座につながった。この時期のラカンは、子どもがはじめて出会う原初的な言語を「ララング *lalangue*」と呼んで分析する。このララングは他のシニフィアンが存在する以前に出会われるゆえに、子どもはそれを困惑する仕方ではしか受容できず、その出会いは子どもの身体の上に自体性愛的な傷としての「享楽」を残すことになる。この身体に刻まれた最初の言葉が「S1」(第一のシニフィアン)に相当する。通常だと S1 は、その後獲得された別のシニフィアンに接続され、置き換えられることによって隠匿され、安定化される(これが無意識=S2の形成に相当する)。しかし ASD 者は、この原初的なララングとの出会いによって刻まれた S1 を、S2 へと接続しないことを「選択」した子どもたちであると規定される(上尾・牧瀬 2017:144)。松本の概説をなぞるならば、このような「享楽」や「ララング」への洞察がその語のラカン派精神分析に受け継がれていく。

また、松本は『人はみな妄想する ジャック・ラカンと鑑別の思想』(2015)の中で、そのような近年のラカン派による再解釈を敷衍することで、最後期の「特異性=単独性」を重視するようになったラカンが、「精神分析をいわば自閉症化し、洗練された自閉症を目指すことを分析の終結に据えることによって、フロイトの精神分析における「終わりなき分析」のアポリアを乗り越えることに成功した」(松本 2015:380)のではないかと示唆している。このようなラカンによる方法論的前提そのものの変更は、まさに既存の定型発達中心主義的な理論的前提に対する批判的乗り越えの過程を考える上で一つの手がかりとなるかもしれない。

そして「哲学」もまた、まさにそうしたメタ理論的な問い直しを絶えず繰り返しながら今日まで紡がれてきた学問であるといえるだろうし、第二節でみてきた様々な研究も、まさにそのような問い直しを試みるものであったと思われる。本発表がそうした試みを触発する一契機となれば幸いである。

※以下、国内の哲学的な ASD 研究を、ここまでみてきた論点を取り入れつつ二種類に大別した図を記しておく（本稿で批判的に検討したのは主に図の左側の理論的前提）。なお本図を作成するにあたって、上述した松本卓也によるラカンの概説と、千葉雅也『意味がない無意味』（2018）の議論を主に参照した。

60年代までのラカンを参照	70年代ラカン・それ以後のラカン派精神分析における ASD 解釈を参照
否定神学システム（S1 が形式的に一） →個々の S1 の「特異性＝単独性」を捨象してしまう	複数的な超越論性（S1 が形式的に多） →個々の S1 を即自的に記述する議論としての「ララング」論
相関主義（遡行的方法によって未分化の領野が析出される）	相関主義の外部の即自的記述（思弁的実在論モデル）
ASD 者における S2 の方の言語使用ばかりが「障害」として前景化される（「コミュニケーションの障害」として本質化される）	S1 と S2 の両方の言語使用がポジティブに記述されうる
「他者」概念が定数的（「大文字の他者」のようなモデルが前提）	「他者」概念が変数的
「みんなが当事者でありうる」＝「みんな同じ S1 を持ちうる」という普遍的包摂の論理	「みんな」に包摂されない狭義の当事者性＝特異性を第一に擁護する論理
ディスアビリティ (S2) がインペアメント (S1) と取り違えられることで、S1 が消去される	個々のインペアメント＝S1 に焦点を当てたうえで、それがいかに社会的コミュニケーションへとつながりうるのかという順に展開されていく

※本稿は、科研費プロジェクト「ASD（自閉症スペクトラム障害）の病理学知見を用いた哲学的構想力概念の再構築」の一環として定期的に行われてきた「構想力と精神病理学」研究会での発表原稿を、そこでの討議を基に改稿したものです。発表時に多大なご助言、ご協力をいただきました「構想力と精神病理学」研究会のみなさまに、ここで感謝の意を表します。

～主要参考文献～

- 相川翼 2017『自閉症の哲学 構想力と自閉症からみた「私」の成立』花伝社。
- 2018「自閉症の哲学的考察による「人間」観の再考」那須政玄・野尻英一共編『哲学の戦場』 pp.319-365、行人社。
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 2008『発達障害当事者研究 ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院。
- 石原孝二 2018『精神障害を哲学する 分類から対話へ』東京大学出版会。
- 内海健 2015『自閉症スペクトラムの精神病理 星をつぐ人たちのために』医学書院。
- 2018「差異と同一性 ドゥルーズ的変奏による ASD の精神病理」鈴木國文・内海健・清水光恵編『発達障害の精神病理 I』 pp.43-67、星和書店。
- 小泉義之 2018『あたらしい狂気の歴史 精神病理の哲学』青土社。
- 河野哲也 2015『現象学的身体論と特別支援教育 インクルーシブ社会の哲学的探究』
- 國分功一郎 2019「類似的他者 ドゥルーズ的想像力と自閉症の問題」檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドゥルーズの 21 世紀』 pp.143-166、河出書房新社。
- ・熊谷晋一郎 2020『<責任>の生成 中動態と当事者研究』新曜社。
- 竹中均 2012『精神分析と自閉症 フロイトからヴィトゲンシュタインへ』講談社。
- 千葉雅也・松本卓也 2016「ポスト精神分析的人間へ——メンタルヘルスの時代の<生活>」『at プラス 思想と活動』 pp.4-31、太田出版。
- 千葉雅也 2018『意味がない無意味』河出書房新社。
- 2019「儀礼・戦争機械・自閉症」檜垣立哉・小泉義之・合田正人編『ドゥルーズの 21 世紀』 pp.271-303、河出書房新社。
- 野尻英一 2018「未来の記憶 哲学の起源とヘーゲルの構想力についての断章」那須政玄・野尻英一共編『哲学の戦場』 pp.1-144、行人社。
- 野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也編 2019『<自閉症学>のすすめ オーティズム・スタディーズの時代』ミネルヴァ書房。
- 松本卓也 2015『人はみな妄想する ジャック・ラカンと鑑別の思想』青土社。
- 2017「ラカン派精神分析における自閉症論」上尾真道・牧瀬英幹編『発達障害の時代とラカン派精神分析 <開かれ>としての自閉をめぐって』 pp.130-162、晃洋書房。
- 2018a『創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで』講談社。
- 2018b「自閉症スペクトラムと<この>性」鈴木國文・内海健・清水光恵編『発達障害の精神病理 I』 pp.43-67、星和書店。
- 三浦仁士 2018「自閉症スペクトラムの存在分節」那須政玄・野尻英一共編『哲学の戦場』 pp.231-277、行人社。
- 村上靖彦 2008『自閉症の現象学』勁草書房。

- ¹ 人間が生きている経験の構造を、まさにその経験に内在しながら記述する現象学的手法を用いた ASD 研究は、村上の研究以外にも複数存在している。例えば河野哲也は、『現象学的身体論と特別支援教育』の第五章「自閉症の現象学」において、本発表の最後にも取り上げる当事者研究の知見を踏まえた独自の現象学的アプローチを試みている。
- ² とはいえ、「他者」という概念が用いられる時、その含意が研究者ごとに様々である点はもちろん留意するべきだと思われる（もちろん本概念以外にも同様のことが当てはまる）。例えば熊谷晋一郎は、國分が論じている「類似的他者」という概念が、西洋哲学史において伝統的に論じられてきた「大文字の他者」のようなモデルとは異なると述べている（國分・熊谷 2020: 298）。熊谷による表現を借りるならば、村上の想定する他者が「定数」（その内実が固定されている）のに対して、國分の議論において「他者」概念は、そこに状況に応じて多様な他者が内包されうる「変数」として位置づけられている。國分は村上と同様、人間は自己を形成したり、知覚経験を構造化したりするために「他者」を必要としていると述べるが、その「他者」は自分自身と「類似した」他者でなければならないと考える。すなわち、どのような存在が「他者」として機能するのかが人によって異なる以上、「他者」概念の内実の変数的なはずである。國分はそこから仮説として、ASD の当事者は「他者」からの触発を受け取らない存在なのではなく、自身と類似した他者に出会えていない、さらに言えば、定型発達の他者を中心に設計された社会によって、そのような他者との出会いを制限されているのではないかという視座を導入する（國分 2019: 159）。このような視座に基づくならば、反対に「他者」を定数として捉えてしまうことは、ASD 者の出会いを妨げている社会をも定数として捉え、その変革可能性が問われなくなり、ASD 者の困難の原因がすべて当事者個人に求められてしまうことになる。この意味で國分の他者論は、本発表が第三節で取り上げる障害の「社会モデル」の問題意識を反映した他者論となっており、村上の他者論とは異なる位相にあると思われる。
- ³ 紙幅の都合から本文では概説できなかったが、竹中は「隠喩」概念を以下のように説明している。私たちは、言語を使用する存在である限りにおいて、言語の世界に閉じ込められており、その外部にあるとされる「現実」には直接アクセスできないようになっている。加えてこのような言語の世界／「現実」の世界という二つの領野は、完全にぴったりと一致しているわけではなく、ゆえに言語とそれが名指そうとする対象との間には常にズレや横滑りが生じることになる。しかし、それでもなお私たちが両世界をズレなしに重なっているように「意識」することができるのは、両世界を繋ぎ止める「一点」が存在しているからであり、まさにその一点こそが「隠喩」であると竹中は説明する。この紐帯としての「隠喩」が機能することではじめて両世界が仮縫いされ、比較的安定した言語使用が可能になるとされる。

⁴ ASD を社会的文脈の中で考察するならば、そもそも近年 ASD がこれほどまでに社会的に可視化され、盛んに議論されるようになったことそれ自体が「社会」の動きと密接に関わっているとみることができる。國分功一郎は、昨今社会の「ポスト・フォーディズム」化が進行したことによって、変動する状況にフレキシブルに即応できる高度なコミュニケーション能力を持った労働者が理想とされるようになったことの裏返しとして、そのように即応「できない」人間として ASD が可視化され「障害者」というラベリングとともに排除されるようになったのではないかと指摘している（野尻・高瀬・松本 2019: pp.293-294）。発表者も、この國分による問題意識を共有するが、本発表で提示した<盗用>の議論はさらに次の段階、すなわち、ASD をむしろ従来の定型発達の思考には縛られない「柔軟な」構想力の発露として表面上は受容しつつ、暗黙裡に定型発達中心主義的な社会規範へと包摂するような段階への警戒と位置付けられる。

⁵ この問題について綾屋紗月は、『発達障害当事者研究』（2008）の中で次のように説明している。「しかし、そもそもコミュニケーションにおける障害とは、二者のあいだに生じるすれ違いであり、その原因を一方に帰することのできないものである。たとえるなら、アメリカ人と日本人のコミュニケーションがうまくいかないときに、「日本人はコミュニケーション障害がある」というのは早合点であろう」（綾屋・熊谷 2008: p.4）。

⁶ このような遡行的方法を採用した場合、構造上 ASD はすでに分節化された定型発達のシステム「以前」に想定される原初的領野へと位置づけられることになるが、この時その領野は、システムの究極的外部として数的に<一>であるため、ASD の各当事者にとって固有に生きられている「特異性 singularity」が数的に<多>であるという複数性を捨象する結果になりえないか、という問いが生じる。このような特異性をめぐる問題は、そもそも「ASD」という言葉でその当事者たちが生きている多様な経験を一般化して語ることはできるのか、という問いとも連動する。

⁷ 村上『自閉症の現象学』の末尾で、このような方法論的水準の問題に関わると思われる以下のような記述をしている。「本書は、定型発達との比較を通して考察したために否定を媒介して自閉症を記述することになってしまった。恐らく本書の到達点から出発し直して、ポジティブに、否定性を媒介することなく、自閉症を記述することが可能になるだろう」（村上 2008: 204）。